

米芾書史所載王羲之帖考

中 田 勇 次 郎

宋の米芾のあらわした「書史」一卷は、法書の閲玩、鑑識、收藏について、もっとも専門的な著述であると言ってよく、法書の研究には欠くことのできない重要な役割を果しているものであり、これなくして法書を語ることはできない。しかし、この著述に関しては、今なお釈読したもののはほとんどないので、ここで改めてこの著述を取りあげてみたい。

私はかつて「米芾著書所見法書目録」(小著中国書論集掲載)を作ったことがある。それによると、米芾の書史に取り扱った法書は、およそ百二十項目ほどあり、西晋から五代にわたり、晋唐の名蹟を主として収めている。かれの書論によると、晋人の真蹟の平淡自然の美しさを最上品におき、晋人の書蹟にはとくに意を尽している。とくに王羲之については、もっとも多く力をそそいでいる。その作は小楷の樂毅論、黃庭經、東方朔画贊をはじめとして、十七帖、蘭亭序から、行書または草書の尺牘のかずかずの名品に及んでいる。その中には、今日、搨模本または墨拓法帖で伝えられるものもあって、王書の研究にはもっとも大きな基本的な文献となるものである。これに次いで王献之、その他晋人の名士の書蹟にも多く説き及んでいる。

ここに書史をとりあげて、その考証を試みようとおもうが、それには、まずはじめに、米芾がもっとも高い鑑識を傾けたところの東晋の王羲之の法書をこの書のなかからえらんで、それについて解読と注記を加えながら、かれの王書に対する鑑識のあとを明らかにしてゆきたい。順序はほぼ前記の「米芾著書所見法書目録」に従った。

樂毅論 梁本

樂毅論の智永の跋に、「梁の世に摹写して内府より出し、天下は之を珍とした。その間、両字を書き誤った。そこで雌黄をもちいて治定(修

米芾書史所載王羲之帖考

正)し、そうしてのち、筆を用いた」とある。今、世上には、この誤った二字を書き改めた本の流传するものはない。余は杭州の天竺僧のところで、一本を手に入れた。上に誤った二字を書き改めたところがあり、また、唐の諱を闕筆していなかった。これは梁本である。

注 智永の跋は法書要録にある、「智永題右軍樂毅論後」をいう。引用には中間を省略している。

雌黄は鉞石の名称。黄紙の上に墨書するとき、書き誤った文字の上にこれを塗って文字を消し、その上からまた改めて正しい文字を書く。

米芾の所蔵または鑑識の樂毅論に、余清齊帖本があるが、別に董授經藏宋拓王帖三種に収めた樂毅論は、第十一行の「致」字を「使」に作り、第二十四行の「從」字を「後」に作っている。また「燕」字(第十四行)の四点は筆勢が連なり、「於」字(第八行その他)の二点が蟬聯しているところが他本と異っている。この本は二字(致、從の二字)の未改古本として、米芾の所見に係ると題記にも考証している。この本には明の董其昌の跋があり、邢侗(子愿)および鄒之麟(衣白)の印記があり、明末文人の鑑賞を経、清末に張鳴珂の長跋を附している。書史に言うところの改誤両字はこの本の致、從二字のことと見られよう。

黄庭経 黄素絹本 六朝人書

黄素黄庭経一卷は、六朝時代の人の書である。絹は完全である。書にはいささかも唐人の気格がない。合縫に「書印」の字の印が捺されている。これは唐の鍾紹京の印記で、この書がかって鍾紹京の家に入ったことを示している。黄素の絹地は縝密できめがこまかく、上下には烏絲織成欄(織成の織り方でありこんだ黒色の罫)がある。その間に朱墨を用いて、行をくぎる罫がひかれている。(たての罫が朱色でひかれていること)。巻末に「台僊」二字を跋し(押署すること、台僊は陳台僊をさす、書史、李邕三帖の条に見える)、「陳氏図書」という字の印(陳台僊の収蔵印)および錢氏(錢鏐であろう)の「忠孝之家」の印がある。陶穀の跋に、

「山陰の道士劉君が、羣鷺を王右軍に献上して、黄庭経を書いてもらうようにたのんだのがこれである。この書は明州刺史李振が、唐の景福年中(昭宗朝の年号、八九二―八九三)、官をやめ浚郊(浚儀県の郊)に立ちよって、光祿朱卿に遺った。卿は、名は友文といい、梁祖(後梁の太祖)の子、のち博王に封ぜられた(新五代史卷十三、朱友文伝に見える)。王が薨じてからのち、余はその旧邸からこの帖を獲得した。時に貞明庚辰の秋(後梁末帝六年、九二〇)のことである。晋が梁を亡ぼして、梁苑に都をさだめた。因って重ねてこの帖を装背した。中書舍人陶穀記す」

とある。

この日、制令を降して、京兆尹安彦威（五代史卷九一、新五代史卷四七に伝が見える）に、副都統を兼任させた。

余の跋に、「『書印』の印は、唐の越国公鍾紹京の印である。晋史（晋書王羲之伝）に、「為めに道德経を写さば、当に羣鷺を挙げて相贈るべし」と記載している。ところが、李白の、賀鑑を送る詩（賀賓客の、越に帰るを送る詩）に、「鏡湖流水春始波、狂客歸舟逸興多、山陰道士如相見、応写黄庭換白鷺」という。世人はこの詩によって、ついに黄庭経を換鷺経とした。これはたいそう笑うべきことである。このように、王が黄庭経を書いたということは、開元以後に言われたことである。世に伝えられる黄庭経には悪札が多い。みな偽作である。唐人は東方朔画賛をやはり真蹟ではないとしている。黄庭経のなかで鍾法（魏の鍾繇の書法）の多いものは、好事者の偽作したものにすぎない。」

注、宝章待訪録には、黄素黄庭経、右、真蹟、字札は古くて、褚（遂良）薛（稷）の体がなく、殆んど六朝人の作るところである。紙縫に、鍾紹京の印（『書印』の印をいう。歴代名画記、叙古今公私印記に見える）。陶穀の漢（五代の後漢国）につかえたときの跋がある。そのことばに、

「これは換鷺経である。甲戌（陶穀九〇三・九七〇の生卒から考えると、甲戌は、乾化四年、九一四、十二歳のときしかない。庚戌の誤ではなからうか。庚戌ならば後漢の乾祐三年にあたる、ただし書史では後梁の貞明六年としている。）九月十一日、百計をめぐらして取得した。この書は詳に観るに、唐の盛時の氣風がない。この書は鉅鋒筆（尖の鋭い筆であらう）で書いたもので、おそらく右軍の書ではなからうと言うのは、もっともなことである。界行に鍾紹京の「書印」二字の小印があり、巻末に、真書で「胎仙」二字が書かれている。「陳氏図書」の印をもちいて捺している。また、錢氏（錢鏐であらう）の「忠孝之家」の印がある。紙跋（紙跋は陶跋の誤りか）に、「山陰の道士劉君が羣鷺を右軍に献上し、黄庭経を書いてもらうようにたのんだというのがこれである」という、逸少（王羲之）の真書はこの経と楽毅論と太史箴と告誓文と累表である。蘭亭序と洛神賦はみな行書である。そのほかはみな草書である。草書の十行は行書一字に匹敵し。行書十行は真書一字に匹敵する。（これは米芾の説）。また、陶氏の続題に「これは明州刺史李振が景福年中、任を罷めて、浚郊を過り、光祿朱卿に遺ったものである。朱卿は名は友文、梁祖の子、後博王に封ぜられた。王が薨じてのち、予は旧邸からこれを獲た。時に貞明庚辰の秋のことである。晋が梁苑に都したとき、因って重ねてこれを装背した。中書舍人陶穀記す」という。

この日、麻（制令）を降して、京兆の安彦威に副都統を兼任させた。米芾（芾）跋に、印の小字は唐の越公鍾紹京の印である。この書は李太師（李瑋）の邸にある。固より甲観（名品）である、という。

以上の待訪録の文は書史の記事を補うことができるが、陶穀の入手の時期が相前後して、いずれとも決めがたい。

米芾の観た黄素黄庭経は、のちに董其昌の容台別集および顧復の平生壯觀卷一に、楊羲和（上清真人と号した）の黄庭経を記載しているのがこれにあたる。董はこれを戲鴻堂帖の巻首に刻している。これは「太上黄庭内景玉経」と題し、上清紫霞ではじまる本文十五行、前後の標題を加えると十七行よりなる。「陳氏圖書」印および「宣和」の印がある、書はきわめて風韻の高雅なもので、小楷中の白眉と言つてよい。戲鴻堂帖のものは内景経の全文ではなく、東書堂帖には百六十七行ある。のちに、趙孟頫が書いたものを、欠損した部分を元の俞和が補書している全百七十五行の本が墨拓法帖として伝えられている。これにはのちに、至正十八年九月、紫芝生俞和の跋がある。内景経は多く楊羲の書と伝えられている。世に王羲之の書とされる黄庭経は外景経であつて、内容も書も異なつたもので、時として両者が混同されていることがある。

唐 寧 黄 庭 経

馮京の家に唐寧黄庭経を収蔵している。書には鍾繇の法がある。のちに褚遂良の押署がある。これまた唐氏の一種の偽好の物である。

注、黄庭外景経のことではないかと思う。以下、単に、黄庭経とあるものは多くは外景経であろう。馮京は宋史三一七に見える。今、唐人臨黄庭経（故宫博物院蔵）がある。あるいはこのようなものであろう。

碧 綾 黄 庭 経

唐氏（唐垌）はまた碧綾黄庭経を収蔵している。褚遂良の書であるというのは誤っている。上に江南の李重光（南唐の後主、李煜）の「清輝」二字の小印がある。これは丁晋公（丁謂）の家に収蔵されていたもので、丁氏の家族のものが質においた。

注 唐垌、唐詢（硯録の著者）の子、王安石のときの諫官。宋史三二七。丁謂、字は謂之、長洲の人。宰相になり晋国公に封ぜられた。宋史二八三に見える。

寧 黄 庭 経

また、かつて摹黄庭經一卷を見たことがある。上に王誨の刻した「勾徳元図書記」を用いてあった。余が観破ったものである。

注 書史に、画は摹することができ、書は臨することはできるが、摹することはできない。ただ、印は偽作することができる。作つたものはかならず原作と異なっているからである。王誨が「勾徳元図書記」を刻して、乱りに書画に印した。余は「元」字の脚を弁出したので、ついに王はその偽作であることを白状した。木印と銅印とは自ら同じではない。みな弁別することができる、という。

ここに観破ったというのは、「勾徳元図書記」の印の偽作であることを観破った意である。

東方朔画賛

右軍の東方朔画賛には、糜ただれ破れたところがある。欧陽詢がそれを補った。丁胤胤字士の家にある。宗室の令時（趙令時）に帰した。劉涿は「僧繇画梁武帝像」と交換したという。

注 歴代名画記巻七、張僧繇の条に、梁武帝像が記載されている。丁胤は孔平仲の談苑に佚事が見える人物であろう（宋人軼事彙編九）。趙令時は字徳麟、また景貺、宋史二四四、元祐黨人伝に見える。詩人としても名がある。劉涿は字巨濟、宋史四四三に伝がある。米芾と親交があり、書画の収蔵でも知られる。

十七帖 関杞所藏本

唐、虞世南の枕臥帖は双鉤の唐摹である。関杞（蔚宗）のところにある。上に「褚氏図書」の古印がある。関は余にこう言ったことがある。むかし、越州のある寺で、仏殿を修理しているとき、梁はりたき拱のなかに、一つの函はこが感かくされて、そのなかに古摹帖数十本がはいっていた。そのなかでとくに取りあげられるものとしては、王右軍の十七帖、虞世南の枕臥帖、十鬪九帖、褚遂良の奉書寧帖がある。上にみな「褚氏図書」の印がある。毫髪はうはつのこまかい部分も、濃い墨の色がごとく備わっていた。関杞は寺僧と親しかったので、枕臥、十鬪九と奉書寧の三帖を手に入れた。

注 関杞は字は蔚宗、錢塘の人、朝奉太夫の官に至った。宝章待章録、唐、虞世南、枕臥帖の条にもこの条と同様の記事がある。

ただし、褚氏を儲氏に作っている。歴代名画記巻三に、「褚氏書印」を掲げて、褚河南（遂良）の印ではないと言っているのがある。同一の褚氏かどうかなお明らかではない。

十七帖 劉涿所藏本

米芾書史所載王羲之帖考

劉涿は宿州（河南）にあって、平生、書を集めている。かれはまず、白麻紙臨顔書太冲序（顔真卿の送劉太冲序）を手に入れた。これこそかれの秘笈の第一品の物である。潤州へ行って、封敖の行書の李文饒太尉（唐の李德裕）の告と許渾（唐の詩人）の詩を手に入れた。次に、智永の板本の千文を得た。そのうち、余が家の十七帖、日本の書および日本の告、吳融、司空図が誓光に贈った歌、張顥、誓光、亜栖等の書、韓幹の馬図、戴嵩の牛図を手に入れた。また、楊傑のところで、貞觀御府の内史（会稽内史、王羲之）の官奴帖を得た。余は十七帖以下の諸物と交換して、余の家に帰したのである。

注 官奴帖を十七帖以下諸物と交換して入手した意であろう。米芾の見た十七帖はどのような形式と内容のものであったか明記していないので明らかではない。米氏が王書のなかで重きをおいたのは、真蹟または搨模本のたぐいで、十七帖は墨書本か拓本が明らかではないにしても、とくに重要なものとしては取り扱われていないのではないか。

封敖、字は碩夫、官は尚書右僕射に至った。旧唐書一六八、新唐書一七七に伝がある。楊傑は字次公、無為の人、礼部員外郎、知潤州となった。宋史四四三に伝がある。米芾の官奴帖と言っているのは、玉潤帖（一名官奴帖）とは別のもののである。待訪録に、双鉤麻紙で王仲修の処にある官奴帖を著録している。これも玉潤帖とは別のものと見るべきである。

双鉤右軍十七帖

無錫の唐氏（唐垌）が双鉤右軍十七帖を所蔵している。精彩がある。錢塘の僧了性が一卷楮紙のものを収蔵している。唐垌の家のものと同一である。また一卷、これは錢氏（錢鏐であろうか）のもので、紙は白。

注 十七帖に唐人双鉤本とよんでいるものがある。（例えば米禽館帖本）。十七行を欠いている。米芾が十七行をさいて画と交換したと伝えられているものであるが、これは米芾に託した逸話のようである。欠十七行本はこのほか余清齋帖、鬱岡齋帖等に刻されている。

蘭亭序

褚遂良黃絹上臨蘭亭序

文惠（王隨）の孫が高郵（江蘇）に居住し、（上記の筆精、日寒帖と）併せて褚遂良の黄絹の上に臨書した蘭亭序一本を収得した。貧乏官吏であったから、余の希みをいれて、五十千でこれを質入れした。余はそのとき、丹徒に遷葬した（父を葬ったことであろう）。王君の友壻、宗

室の時監（官職であろう）羅務令輓と約束して、別れるときに、かしこに行ってから帖を交易しようと約束した。王君（王景昌）は私より五日おくれてやってきた。余はちようど父の葬儀で取りこんでいたので、かれに面会する暇がなかった。葬儀が了って、かれに面会すると、ちようど今、沈存中（括）がこれを借りていったところですよ、というので、私はしまったと股をたたいてびっくりして、この書はもう帰ってこないぞと言った。そこで余は沈のところへ行って、たずねると、沈は、まあびっくりするな、これを手に入れたいのなら、あなたの王維の雪図と交換しましょう。あなたの父はかつて与えることを許していました、という。余はもはや何も言わなかった。のち、数日たって、王君（王景昌）が楮書をたずさえてやってきた。そしてたいそう歎いて、沈は、その増が、二十星でその行旅の資本にさせようとしています、何とか二十千で楮書売るのを止めさせて、のこしておきたいものですという。余は、困ってもう手に入れようとはしなかった。のち、十年たって王君（王景昌）が卒した。その子は高郵に住居していた。婚姻の事を成就しようとして、賀鑄（宋史四四三）につてをもとめて、たずさえて儀真（江蘇）に至り、二十千で売ろうとした。のち、丞相の蘇頌（宋史三四〇）の家が、沈の子、博毅と会合したとき、この帖の所在をたずねたが、その弟に分ち与えたと言っていた。あくる日、蘇舜元の子にきくと、しばしばこれを見たと言っていた。

注 宝晋英光集に「跋楮模蘭亭帖」と題して、この本の米跋が載っている。右、唐中書令河南公褚遂良、字は登善が晋右將軍王羲之の蘭亭宴集序を臨したもので、本朝の丞相王文恵公（王随）の故物である。辛未の歳（一〇九一）、晁美叔（端彦）の書齋で見た。文恵公の孫から借りたという。辛巳の歳（一一〇一）公の孫の嶽から購入した。黄絹の幅は、「欣」字のところで合縫している。（紙の継ぎ目になること）。これで、摹本の「僧」字は（ちようどこの場所にあるので）果して徐僧權が合縫に書したところの押署であることを証明している。王帖を臨したものであるが、まったく楮法である。その状は、巖々として奇峯の峻しきがごとく、英々として穠秀の華のごとくで、翻々として自得すること飛挙する仙人のごとく、爽々として弧鶩なること、逸羣の鶴に似ている。恵若は和風の麗なるを振り、霧露は秋幹の鮮なるを摧んず、肅々として慶雲は霄に映じ、矯々として龍章は彩を動かす、九奏万舞、鸛鷺は庭に充ち、鏘玉、鏘を鳴らし、竊窈として度に合す、宜なるかなその拝章の、帝の留賞する所となる。「群賢也至於永和」の字は、全くその雅韻に效っている。「九」「觴」字は備さにその真標を著している。「浪」字は書名（褚遂良の良字）に異なることなく、「由」字は益々その楷則を彰らかにしている。一たい臨倣は魏、薛（魏華と薛稷をいう）よりも推称されるものではなく、賞別は欧、虞（欧陽詢と虞世南）よりも名の聞ゆるものはない（のに比す

べきで、まことに百代の秀規、一時の清鑒である。壬午八月二十六日、宝晋齋舫手装、襄陽米芾審定真蹟秘玩。という。

この本はかつて斎藤董齋の所蔵であったが、今は台湾の林柏寿氏に帰し、近く、故宮博物院に、寄贈されている。民国十三年文明書局刊の影印本や日本では博文堂の影印本もあり、諸跋は備わっている。米芾の墨書した跋も今なおある。ただし、米書では「巖々」を「岩々」に作り、「肅々」を「蕭々」に作り、「群賢也」を「群仙也」に作り、「全效其雅韵」の效字がない。「群賢也至於永和字」はみな蘭亭序中の文字をいうのではなからうか。記事の文としては読み難い。何か誤りがありそうである。

蘭亭考では、この跋を引いて、「黄絹幅」を「黄素両幅」に作り、「和風之麗」の注に「一作靡」とあり、「全效其雅韵」の效を呈に作り、「莫称于魏薛」を「莫推於魏薛」に作り、「本朝丞相王文惠公」以下「購于公孫嚙」までを「一時之清鑑也」の次ぎにおき、末尾には「四月念二日宝晋齋舫手装」とあって、日付けがさきのものと異っている。

この本には紹聖丙子（三年、一〇九六）李伯時（公麟）の跋があり、また、蘭亭考に収載されている。

宝章待訪録に、宋羊欣宋翼二帖并褚令模蘭亭、右、中書舍人蘇軾が、故相王随の孫、景昌のところにあるという。撫石は湖州墨妙亭にある。しばしば石本を見たことがある。今、沈存中括の家にある、という。

張鑑の墨妙亭碑目致に著録されている。羊欣宋翼二帖の方は佚とある。待訪録に褚令模蘭亭、王随の孫のところにあるというのは、この黄絹本をさすであろう。

唐絹本 蘭亭

劉涇（宋史四四三）が漣漪（江蘇）から書簡をよこして、「唐絹本蘭亭を収得しました。めずらしい収獲がなくて、しばらく眼を漫にみだりするだけです。自らとりたてて申上ぐるほどではありません」という。余は詩をもって答えた。「劉郎、物の心に縈るべきなく、蠶繅と断簡に沈迷す。新を求めて獲ず、狂、時に発す、自ら謂う下取して且く眼を漫にせんと。漪嗟、斯のごときの人、今、実に尠し、我、之に従わんと欲するも、官に限りあり、何れの時か劉子の前に大叫して、いざまう跟いて墨皇を閲し、三たび復返せん」と劉君が余に詩を貽り、「秘笈の墨皇、曾て敬識す」と言ったことがある。林希（宋史三〇三）が余を送るの詩に「壺嶺、共に傾く、銀雪の水、墨皇、猶お展す玉樓の風」という。壺嶺は硯山のことを言ったのである。

注 この詩は宝晋英光集卷三に収録されている。「劉涇新収唐絹本蘭亭作詩詢之」と題している。

蘭亭 三本

蘇耆の家の蘭亭三本。第一本は参政の蘇易簡の題賛に、「有若像夫子、尚興闕里門、虎賁類蔡邕、猶旁丈學尊、昭陵白一閉、真跡不復存」という。今、余はこの本を獲得した。璵璠（美玉）にも比べることのできるものである。第二本は蘇舜元の房にある。上に、易簡の子、耆の天聖年間の跋がある。范文正（范仲淹）、王堯臣参政の跋に、「才翁（蘇舜元）」東齋の書は、かつてことごとく閲覽した。」とある。蘇洵は才翁の子である。余と親しく交際している。王維の雪景六幅、李王の翎毛一幅、徐熙の梨花の大折枝と交換して入手した。この書は毫髪のような微細な部分もことごとく備わっている。

「少、長」字は、世に伝わる衆本はみなこれに及ばない。「長」字はその中の二筆が相近い。（二本の横画が接近している意か）。最後の捺筆（右下に向う筆法）は鈎廻まがっている。筆鋒は直に起筆のところに至っている。「懷」字の内の折筆、抹筆はみな転側し、偏して鋒をあらわしている。「懷」字の内、「斤」字と「足」字は、転筆のところが、賊毫（ほつれた毛）が之に随い、筆を斫るところにおいて、賊毫が直にその中から出ている。世上の摹本には、まだ見たことのないところである。これはかならず馮承素、湯普徹、韓道政、趙模、諸葛貞の流の手によって揚模して王公に賜ったものである。碾花真玉軸、紫錦の装背をなしている。蘇氏舜元の房にある。褚遂良摹と題している。余の跋に。

樂毅論は正書第一であるが、これは行書第一である。その誤りを改めた文字を観るに、多く卒意につくられている。すべて緒体を備えている。余はみな妙を尽している。この書は真跡を下ること一等であり、深く書を知るものでなければ、語ることはできないのである、と。

賛に、「熠熠たる客星、豈に晋の得る所ならんや、器を泉石に養い、腴を翰墨に留む、戯れに標談を著し、書は式を存焉す、鬱々たり昭陵、玉璽、已に出づ、戎温、類なし、誰か真物を宝とする、水月、虚に非ず、移模、質を奪う、續繰金鐫、瓊機錦綉、猗歟元章、之を守って失うこと勿れ」という。

第三本は、唐の粉蠟紙の摹本である。蘇舜欽の房（書齋）にある。さきに第二本について論ずるところの数字の精妙なところは（少長等の字をいう）、この本ではみな及ばない。しかし、もとより第一本の上にある。これはその族人沂の摹したもので、第二本と比べて毫髪も差たがわない。

世上には十余本あることとおもう。一絹本は蔣長源のところにある。一紙本はその子、之文のところにある。これは蘇舜欽の本である。一本

は膝中のところにある。これが余の家に帰した本である。一本は之友のところにある。

注 蘇晋の家にあった蘭亭三本のうち、第一本は蘇晋の父、蘇易簡の題賛があり、米芾が入手したもの。おそらく、蘇舜元（一〇〇六一〇五四）の子の蘇洵から手に入れたのであろう。

第二本は、蘇舜元の房にあり、その子の蘇洵から、收藏品と交換して入手したものである。この本の跋は宝晋英光集卷六に載っている。「褚摹右軍蘭亭集序賛、有序」と題し、

右、米姓秘玩、天下蘭亭本第一、唐太宗獲此書、命起居郎褚遂良檢校、馮承素、韓道政、趙模、諸葛貞、湯普澈之流、撫賜王公貴人、著于張彦遠法書要録、此軸在蘇氏、題為褚遂良撫、觀其意易、改誤數字、真是褚法、皆率意落筆、余字皆鈎填、咸清潤有秀氣、輒摺毫銚備盡、与真無異、非深知書者、所不能到、世俗所収、或肥或瘦、乃是王人所作、正以此本為定、賛曰、耀々客星、豈晉所得、養器泉石、留朕翰墨、戲著譚標、書存馬（焉字の誤）式、鬱々昭陵、玉盃已出、戎温無類、誰寶真物、水月何殊、志專用一、繡纈金鑄、瑤機錦綉、猗歟元章、守之勿失

とあり、注に、

壬午閏六月九日、大江濟川亭藏寶晋齋舫、對紫金浮玉羣山、迎快風銷暑重裝

文に多少の異同がある。壬午は崇寧元年（一一〇二）にあたる。この本は清の吳升の大觀録卷一に収載されている褚河南摹蘭亭序卷にあたるようである。蘇易簡が「褚摹王羲之蘭亭序」と題している。白麻紙の摹本である。上記の米芾の跋並に賛はないが、米芾の「永和九年暮春月、内史山陰幽興發」七言古詩一首を載せて、「楚国米芾」「楚国芋氏」「米黻之印」等の印記がある。「天聖丙寅年正月二十五日重裝」とあるのは蘇晋の題記である。また、錢氏の「忠孝之家」の印があり、范仲淹の題記に「才翁東齋所藏圖書嘗尽覽焉高平范仲淹題」とあり、王堯臣の觀款に「皇祐己丑四月太原王堯臣觀」とある。米芾の跋記があり、「元祐戊辰二月獲于才翁之（及）子洵字及之米黻記」とあり、入手の年月を明記している。そのほか劉涇の「簡池劉涇巨濟曾觀」があり、その他、宋元名家の諸跋がある。下永營の式古堂書畫彙考卷五に、「褚模王羲之蘭亭序」と題して収録しているのが、大觀録のこの本と同一であり、題跋はさらに多い。大觀録卷一には、また、「褚遂良紙本蘭亭卷」というものを著録しているが、これにもまた「右米姓秘玩天下法書第一」云々の米氏の跋を附している。しかし、こ

の本には上記の范、王、劉等諸家の題跋はない。この本の米跋は疑わしい。米芾の跋を偽作して附け加えることは時に見るところである。

原文「其族人沂羣、蓋第二本」を蘭亭考では「其族人所摹是第二」に作る。書史の沂字は所の誤かもしれない。

第三本は、蘇舜元の弟の舜欽の書斎にあるもので、第一本よりはよく、第二本を摹したもののようである。宝章待訪録に、王右軍蘭亭燕集序、右、唐粉蠟紙双鈎本、蘇澈（舜欽の子）の処にある。精神筆力は毫髪までもことごとく備わる。真蹟を下ること一等である。これは馮承素の輩が、搨して大臣に賜ったもので、舜欽の父の集賢校理の書が、蜀で購入したのである。僧元霈某は澈と親密であったので、つねに公を訪れると、必ずこの本をとり出して見せていた。そこでこの本を親しく背飾したのである、という。

滕中は元発の子、字は元直、皇宋書録に小伝が見らる。蘭亭八柱第二は滕中の印記があり、諸般の考証の上これを書史の滕中所蔵の一本で米芾に帰したものとする説がある。（書道全集）。

唐刻板本蘭亭、三米蘭亭

泗州南山の杜氏。父は尚書郎となった。家は代々杜陵の人である。唐刻板本蘭亭を収蔵している。わが家に収蔵する本と同じである。筆鋒の勢が活きいきとしている。余はこれを手に入れて、この本を板に刻した。定本（定武本）および近世のでたらめな刻本と比較してみるに、異なっている。この書は後世に亡びないものであるが、それにはこの本があるのに頼る。好事者から求められたので、一本を与えた。今はもう二度と手に入らない。世にこれを三米蘭亭という。

注 泗州南山杜氏は、杜宝臣、字は器之、盱眙南山（安徽）の人。宋の桑世昌著蘭亭考に所載の二跋によって、この帖のことがわかる。

盱眙南山杜宝臣、字器之、父為令、祖皆為郎、家世伝此唐刻板蘭亭、余与三子、五日模、視善工十日刻、世謂三米蘭亭、出於此也、杜欲百本、而以此見歸、乃好事欲広其真爾、壬午五月、西山宝晋齋手裝、是歲既得上皇山洞天一品食、甘露降林木竹石一歲也。

泗南山杜宝臣、字器之、祖兩世為郎、父為令、家伝唐模印本、与購於蘇太簡家、貞觀名手双勾本、微有出入。吾行年六十、閲書一世、未之見也、父子三人、逐字撫於第一軒、命工十日刻成、世謂三米蘭亭、此其祖也、丹陽郡甘露降吾家西山書院梧桐之歲、崇寧壬午五月十七日、宝晋齋致爽手製、襄陽米芾元章秘玩、

三米蘭亭のいわれは、米芾が二子とともに唐刻蘭亭を模刻したところから出ている。蘭亭考には、また、米友仁の跋一則を収めている。その跋文中に、「建中靖國元年淮山樓以杜本一刻以貽有識」とあり、崇寧元年の前年に刻していることがわかる。

趙叔盦本

宗室の叔盦（趙氏）が蘭亭を收藏している。遂に私の家の本には及ばないが、蘇舜欽の本の上にある。因って重ねて装背して、その後背の紙をとりかえたが、遂に精彩に乏しい。しかし、都門においてはもっとも佳本であるとおもう。王章（宋史三二〇、字は定国）が余の家の印本を求めて、これは湯普徹の摹したもので、王詵の家に贈った摹本と同一のものである。今、たいそうこれに思いをかけて、これを手に入れて自ら解明しようとおもうという。

唐石本蘭亭

錢塘の関景仁が唐石本蘭亭を收藏している。定本よりは佳いが、余が家の板本には及ばない。

注 余家板本は前記の三米家本のことであろう。関景仁は関魯の子、字は彦長、また子開、治平年間の進士。蘇祠從祀錄（吳騫撰）に見える。

古摹蘭亭

程師孟（字公闢、宋史三三一）が余に語げた。四十千で古摹蘭亭一本を収得した。白玉軸である。出して見せようとしたが、ついに手に取ったことはない。今、子の、程宏のところにある。王安上が曾てこれを見た、という。

注 この文は蘭亭考にも引用されているが、文字に異同はない。王安上は人名らしいが、文字に誤りがあるかもしれない。待訪録には、なお次の一項があるので補っておく。

蘭亭樞本

宝章待訪録に、蘭亭樞本、右、正義大夫章惇跋、蘇澈の収得した蘭亭に、此れは吾家の收藏するところと同じであるという、とある。
注 蘇澈の収得した蘭亭は上記の第三本にあたるであろう。

筆 陣 図

王右軍の筆陣図、前に自写真（王羲之の肖像画）がある。紙は金葉のように、^{ひきし}緊まって薄く、索々と音がする。趙疎がこれを一道人から手に入れた。章惇が借りたまま、返却しない。

注 宝章待訪録に、王右軍筆陣図、前に自写真がある。紙は金葉のように緊薄で索々と音を立てる。右、章子厚（章惇）の家にある。章公は自ら、趙疎から借りたという。今、蔡河のために撓発された、という。撓発の意は召し上げられて奪われたことをいうか。

筆陣図は衛夫人筆陣図が法書要録にあるが、王羲之は書筆陣図後を書いているものが伝わり、筆陣図そのものではない。唐の孫過庭の書譜に王羲之の筆陣図を記載しているから、王羲之にも筆陣図を作ったという説が以前からあるわけである。ここでは内容がなお明白ではないが、首に王自身肖像画を掲げているから、王が衛夫人の筆陣図を書いたというよりも、王自身の著述としての筆陣図のようである。

張彦遠の歴代名画記巻五、王羲之の条の注に、臨鏡自写真図が記されている。王が自ら鏡に向ってえがいた肖像があったことがわかる。自写真というのはおそらくこの画に基づくものであろう。

王右軍書、家 譜

王右軍の書いた家譜は、山陰県王氏にある。

注 宝章待訪録に、王右軍書、家譜。右は山陰県王氏の家にある。越州教授王渙之が、書簡を某氏に与えて、つぶさにこの書のあることを述べている、という。王渙之、字は彦舟、宋史三四七に伝がある。

唐摹右軍帖 末後一帖奉橘帖

また、唐摹右軍帖がある。双鉤蠟紙摹本である。末後の一帖は「奉橘三百顆、霜未降、未可多得」とある。韋応物の詩に「書後欲題三百顆、洞庭更待滿林霜」とあるのは、このことを用いたのである。開皇十八年三月二十七日、参軍学士諸葛穎、諮議参軍開府学士柳顧言、釈智果がその末尾に跋している。

注 末後一帖は今日、著名な奉橘帖のことである。従来の説では、隋の年紀の跋があつて、米が唐摹と言っている点に問題があつた。しかし、詳細に見ると帖の本文と跋尾は一紙に双鉤填墨によって模写されたもので、本文跋尾をあわせて、米の言うとおり唐摹と見てよい。

最近、知人がこの拡大写真を携えてきたのによってこれを確かめることができた。

稚恭帖

晋右将军会稽内史王羲之行書帖、真蹟、天下法書第二、右軍行書第一である。帖の辞に「羲之死罪、伏想朝廷清和、稚恭遂進鎮、東西齊舉、想尅定有期也、羲之死罪」とある。長慶某年月日、太常少卿蕭祐鑒定、王珪（禹玉）（一〇一九—一〇八五）のところにある。のちに禹玉の跋があり、「門下省印」を捺している。当時の高貴の人が多く跋をしている。のち、章惇（子厚）が借りていつて返さない。その子王仲修（王珪の子）が熱心に紹介して返還を請うたが、まだ返ってこない。この書は竹絲乾筆で書いたもので、筆鋒の勢が鬱勃し、揮霍濃淡は雲煙のごとく、変怪多態である。「清」字が破損している。余は親しく之を臨することができた。

注 この帖は今、東書堂帖に刻されている。行書四行、帖の文章は書史と同一である。「清」字の左方が欠けているところも一致する。待訪録にも掲載し、麻紙といい、王仲修を丁仲修に誤っている。宝晋英光集に、王右軍稚恭帖賛がある。

桓公破羌帖 王略帖

王羲之の桓公破羌帖には「開元」の印がある。唐懷充の跋（ここは押署の意）がある。筆法は神に入る。蘇之純（蘇澄の子）の家にある。之純が卒し、その家では値段を定めて、ながいあいだ売りに出していた。余は西京に使用してまだ帰らないうちに、宗室の仲爰がきばって買い取ってしまった。その上、約束をして、米氏が帰ってきて、その言値がよければ、ゆずり渡してもよいと言った。余はそこで衣類を質において、その値段を増加して買い戻した。しかし仲爰はすでに下手な職人に装背させて、古い跋尾を剪りとしてしまい、ばらばらになってしまっていた。何としても痛ましい限りである。

注 宝章待訪録に、王右軍相温破羌帖、開元の印と唐懷充の跋がある。右、筆法は入神奇絶である。この帖は王仲脩の家の稚恭帖とともに神物である。「開元」の印と唐懷充の跋がある。蘇澄（道澍）の子、之純のところにある。之純は今、歙州の判官となっている。

破羌帖は一名王略帖。米芾の刻したものが宋拓宝晋斋法帖の巻首に掲載されている。この帖は米芾が入手して、王書の最上品として愛蔵したものである。宝晋英光集に王略帖賛と跋王右軍帖がある。小著中国書論集、宋拓宝晋斋法帖鑑賞記参照。

玉潤帖

王羲之の玉潤帖は、唐人が冷金紙の上に双鈎した摹帖である。その文に、

官奴小女玉潤、病来十余日、了不令民知、昨来忽発痼、至今転篤、又苦頭癰、頭癰已潰、尚未足憂、痼疾少差者、憂之焦心、良不可言、頃者艱疾、未之有、良由民為家長、不能克己勤修、訓化上下、多犯科誡、以至於此、民惟婦誠、待罪而已、此非復常言常辭、想官奴辭已具、不復多白、上負道德、下愧先生、夫復何言。とある。この帖は稚恭帖の後につづいている。文字の大きさは蘭亭序に似ている。その真蹟は、さだめし神妙なものであろう。

注 玉潤帖は一名官奴帖という。宋拓宝晋斋法帖に刻されているのは、米芾所見の帖であろう。明の集帖、快雪堂帖、戲鴻堂帖などに刻されている著名な法帖である。

王氏書苑本に病来を病後に作るのは誤りであろう。帖に校合すると、「已潰」の已を以に作り、「未足」の未を不に作り、「克己」の克を剋に作り、「勤修」の勤を懃に作り、「已具」の已を以に作る。みな帖に依るべきであろう。

宝章待訪録に、王右軍玉潤帖、右、蘇州教授閻丘籲云う、承議部建安の王寔のところにある。古跋があり、装書人（表具師）に装背せしめたが、久しく返還しないばかりか、跋を半分剪りとってしまった。みな唐名公のものである。告訴したが手に戻すことができなかったので職人に四十千の陪償を要求した。このことから原本を切りとって少なからぬ金もうけをしたことがわかる、という。待訪録のこの文に記しているのは玉潤帖の真蹟のようで、前記の模本ではないようである。

快雪時晴帖

帖に「羲之頓首、快雪時晴佳、想安善、未果為結、力不次、王羲之頓首、山陰張侯」とある。真字の体にかかっているが、数字は行体を帯びている。今、世上には、右軍（羲之）の真字の帖はない。帖末に「君倩」二字がある。これは梁秀の押縫（紙縫の押署）ではないかとおもう。「褚氏」二字の印がある。これは褚令（遂良）の印したものである。蘇氏には、三本あって、諸房に蔵されている。そのうち一本は余が交換して入手した。一本は劉涇（巨濟）が手に入れた。ただし、劉の本には褚の印がない。

注 書道芸術一、中国書論集、宋拓宝晋斋法帖鑑賞記参照。

筆精帖

米芾書史所載王羲之帖考

王羲之の筆精帖は、帖内の両字は、集字して諸家の碑の上にある。押縫に、「貞観」の半印がある。

日 寒 帖

王献之の日寒帖には、唐氏雜跡の印がある。帖後に、謝安の批二行がある。いわゆる帖の後に批して答と為したものである。唐太宗は献之の慰問の帖を敬ばなかつた。ゆえに帖上から「不次献之白」の字を刮り去って、これを羊欣の書といい、そうして募集に応じた。そして前帖（筆精帖）を薄紹之の書とした。跋尾に官姓名を書して「大曆某年月日」と記した。帖末では古い姓名を刮り去って、五代の人が題して「薛邕、之を記す」という。後に一行を題して「某年、和傳（和凝のこと）余に遺る」とあり、押字には薛丞相居正とある。

これは和凝丞相が改めて薛氏の故物と為して、それを薛（居正）に遺ったものである。そのち王文恵の家に帰した。

注 宝章待訪録に、王右軍紙妙筆精帖、「貞観」の印がある。王大令日寒帖、「唐氏雜迹」の印がある。右は故相王曾の家の物で、その孫景融のところにある。後に前龍圖待制の沈括（存中）のものとなった。あとについていた古跋は取られて、右軍を羊欣とし、大令を薄紹之とし、そうして大中歳の跋から、数字を刮り去って、「薛邕之を記す」という文字を填入した。そして故相薛居正が題して「和傳、余に遺る」と記した。これは和凝が薛氏の故物として、薛居正に所蔵させたのである。唐太宗はもとより子敬（王献之）の書をこのまなかつた。ゆえに当時の人々は他の人の名を之に名づけて、募集に応じた。さきにのべた薄紹之の書では、日乃于耳の字は刮り去らず、「及不次献之頓首」の字は、なお一分ばかりある。大中年間の跋はもはや弁別することができないまま、また鑒識にくらい人々の所有となつて、大切な宝物が永久にその真の相を失うことになった。なんと痛ましいことではないか、という。

筆精帖は二王帖と澄清堂帖（戲鴻堂帖本）に刻されているが、かなり残欠している。日寒帖は重編本宝晋齋法帖に刻されている。「及不次献之白」字はない。岳珂の法真齋法書贊には、米芾の臨した筆精日寒帖を掲げ、釈文を加えている。釈文は現在の帖に比べて欠文のないものが著録されている。ただ、「及不次献之白」の六字は米芾が意をもって補ったとしている。

書史の王文恵は、待訪録では王曾としている。王曾の諡は文正である。法書贊では王文正と言っている。書史の王文恵は王文正とする方がよいであろう。おそらく、書史では、この文につづく王文恵本蘭亭序と混同したのではないか。

来 戲 帖

王羲之の来戲帖は、黄麻紙に書かれている。字法は清潤である。若いころに書いたものである。紙幅一ぱいに書かれているが、その間、数字読みにくい文字がある。六朝の人が写して、傍らに注を加えている。後世の人がまた雌黄をもちいて塗り掛けている。年月が立って、膠が剥落して、文字が五分の一ほどあらわれている。この帖は丁晋公（丁謂）の孫（丁景）の、絵像恩沢を受けたものの書斎のうちにあり、晋公の故物であるという。二十千（二万）の価で人に手渡そうとしていた。余はさっそくその値段で買い取ろうとした。君はすでに余と来往してこの帖について相談をなし、余も跋をかいてその帖後に粘装までしたが、ついにその鄰の大姓賈氏に質入れして、二十千を手に入れた。何とかしてもとに買い戻すべきものであるとおもいながら、今もう十五年をへているが、まだ賈氏のもとにある。かつてある人が薄い紙でこの帖を搨（うつ）しとった。そのとき、墨が数行にわたってにじみ透って、静地（文字の周辺の白い紙の部分）まで汚れてしまった。たいそう歎かわしいことである。その家にはまた、韓攄木の八分一卷がある。唐人の薄紙で摹した五帖一幅である。

注 この文は宝章待訪録には、王右軍来戲帖、右、麻紙、六朝の人の臨するところ。小真字を旁注し、数校してまた雌黄で覆うている。蘇州の故相の丁謂の孫、丁景のところにある。のち、一万の値で鄆州の梁子志のところへ質入れした。梁子志は梁適の孫である。また、唐の双鉤の樞帖があり、これも丁景のところにある。某（私）はどちらにも題跋を書いている。

原文「六朝写經編字注之、後人復以雌黄塗蓋」を待訪録では「六朝人所臨写、旁注小真字、数校復以雌黄覆之」に作る。蓋は覆蓋の意であらう。

この帖は現存の法帖には見当らない。

書史所載の王羲之帖は、なおこのほかに二十二項ある。その中の思言叙帖、鵠等帖、喪鮮帖などは現存の法帖に伝えられるものである。これらの二十二項については紙幅の都合により、次の稿に譲りたい。上記の米芾の鑑識した王帖の大部分は、かれの書論における晋韻を具備した名品であり、のちの明清に栄えた集帖の中心をなし、法書研究の基礎資料として重大な意義をもつものである。さらに次稿において米芾の書論を究明することとしたい。